

松魚釣り

かはぐち

目に青葉、山ほととぎす、初かつを、葉堂
日本内地に恰度青葉の五六月の交、暖潮がだん
く北をさして南海岸を洗ふやうになつてくる
と、きつと松魚が群をなして押寄せて来る。海の
魚族は随分澤山で迎へる人間では未だ数へきれない
ほどさま／＼である。その中で一番サツパリと男
らしいのが此かつをである。尤も鯉にも父もあり
母もあり兄弟もあり姉妹もあるが、それ等は何れ
も根性は如何にもシャンとして居るから、人なら
侍根性ともいひ得べきものゝやうである。
松魚の性行及び漁師がそれを漁獲する法などに
就いては、知れる人は割合に少い。讀者の中にも
書物などで承知した人はあるであらうが、實地に
觀察した人は恐らく一人もないかも知れぬ。何故
なれば、鯉釣りの船には素人乗せて行かぬのが
古から彼等漁師仲間の不文の内規であつて、中
々嚴格にそれが實行せられて居るから、大膽な斷

言のやうだが、讀者の中には未來は兎に角今日ま
でには實地に見た人はないといひ得る。
實は、漁師仲間には右に述べたやうな内規がある
ことを聞いて、之を破らしめて此實驗談の材料を
得ることに随分苦心をした。誰に頼まれたので
もない全く自分で實見してみたくて、生來下りに
くい頭を幾度か彼の赤銅製の仁王のやうな漁師の
前に下げて、懇に頼んだところ、果して吾輩の思
ふ坪に當つて成功した。といふのは、吾輩の劈頭
から頼んだのが漁師共の内心の何處かにふれたと
見えて、いひらは板は一枚、下地獄、大臣様もな
ければ大金持もない、何時もオカシな奴等が來や
がつて、いひらに威張つたり金を出したりして『乗
て行け』といひよるから、胸くそがわるくつて何
時も『ならぬ』つて斷つてやるのだが、お前さ
んのやうな本氣で觀たい人なら、いひらも見て
もらいたいよ。といひ出したから、吾輩はシメた
と内心に面白く思つたが左あらぬ體に、邪魔では
あらうが、さうしてもらへれば誠に幸だ、と挨拶
をして到頭便乗して、實際目撃したそのありのま

ゝのところは下の如くであつた。
 眞鯉ならば近海でも漁れるが、吾輩の便乗した
 のがスズ鯉といふ大きい奴に漁る船であつたか
 ら、遠く乗り出した、船は十人の専門家と吾輩一
 人で総員十一人。濱を出る時は二人で漕いで居つ
 たが、松の並木が唯緑の棒を横べたやうに、濱の
 眞砂を行きかゝ人の豆のやう釘のやうになつて行
 くにつれて、廣つひろとした沖に出て、それから
 は誠にゆるやかに漕ぐやうになつた。後に三艘ば
 かりつゝいて居る。最初から緩く漕ぎ沖へ出てか
 ら一層そろ／＼漕ぐのは、之は多分鯉を驚かさぬ
 爲の用心と思つたのは矢張素人考であつた、實は
 船の舷の方に少し隔てゝ、直徑五尺あまりの夏密
 柑を俯向けにしたやうな籠、俗にいふ生け簀を太
 い綱で曳いて居ることがわかつた。その生簀の中
 には生きた鰯が潑刺として居る。それが即ち鯉を
 釣る爲に用意した餌である。聞けば他の魚は大抵
 な餌でも懸かるが鯉は生きた餌でなくては懸らな
 いとのこと、其威張加減が獅子のそれと全く一致
 して居るから面白い。

大陽が海の上にキラ／＼して居る。時計を見る
 と午後一時過ぎでゐつた。漁師共サア之から釣ら
 うと用意にかゝつた。ドウやら鯉の進行的道筋に
 出遇つたらしい。併し時計を眺めながら吾輩は漁
 師の頭に對つて、川の魚は早朝から十時まではよ
 く餌にかゝり、その後はだん／＼つかなくなつて
 正午から午後二時過ぎまでは殆んど全くかゝらな
 い、その後夕方になるまでは又よく餌にかゝるの
 が普通であるが、海の魚は日中而かも此午後一時
 過ぎに懸かるであらうか、と尋ねてみると、鯉は
 日中でなければ旨くかゝらない、彼奴は夜やたそ
 がれなどの曖昧な時に餌を漁らぬ性質だといふ返
 事であつた。曖昧な時に間違つて針らるゝのより
 は白晝に堂々釣り上げらるゝのが、人間から見れ
 ば可愛ゆくて男らしいと賛成したくなる。殊に非
 常な彼等の群集になると押しつ押されつ行進する
 ものだから、澤山の中には隣のものから押し上げ
 られて背が海の表面から外に曝らされて乾燥して
 しまつて下半分は元氣な鯉で上半分は乾物の鯉甚
 しきは鯉節となつたまゝで、エッサ、ヤッサと押

して来る。さういふ場合には、鯛の餌も要らない、鯨の鬚で製した偽の餌でもバク／＼と懸るさうである。が吾輩の見て居つた此時はさうひどくはなかつた。

生簀を舳に引寄せて、手綱で捌つてバラ／＼と散く。之は鯨をよせる爲のマキ餌である。マキ餌がすむと、愈釣り始めた、竿といつたとて桿の字を用ひた方が適當で、長さ三間許、或三郎の持つたやうに未の撓むようなことのない唯の棒のやうな竹で、糸の端に釣をつけ、それに生きた鯛をつけた丈で、浮キもつけねば重りもつけて居ないが、見る／＼うちに喰つ付いて来る。手むたへがある、と、漁師が一種得意の調子をとつて颯／＼竿を上げて真直ぐに立てると、喰付いた鯨が丁度漁師の脇のところへゆれてくるやうに糸の加減がよくついて居る。脇へ来ると些と上膊で押めると、釣と鯨とがサツ／＼離れて同時に上膊の押へがゆるんで、鯢が舟の中でバチ／＼躍つて居る。漁師は一向平氣で第二の餌を釣につけ替へて又投げ入る。之を素人が眩ふ位も早くくりかへして、釣る

とも／＼、見る／＼うちに船底が鯢の積かと思はるゝまでに釣り上ぐる。上手な漁師になると脇に抱えるほどにも至らぬ。サツ／＼上げたと見る間に、ドウかの手加減で、懸つた鯢がバラツと離れて船底に程よく踊り込む。釣針は丁度其漁師の膝の上に来る。早速餌をつけて又投込むといふやうな頗る敏捷なものである。

唯一の一尾でも懸つた鯢を一旦落して海へ歸らしなならば、それこそ最後、丸で半匹も喰付かなくなる。況して慌てゝ人でも轉がり落ちやうものなら、それ限りである。ウツカリ手足を一寸浸たす丈でも早や全く喰つ付かなくなる。こんなところは鯢は除程過敏である。元來鯢釣は舟の片方の舷で十人並んで釣ることだから、非常に喰付く場合には往々過つて釣手が舳からこぼれることはある。之が鯢をつるには非常に禁物なる故、素人を鯢釣船に乗せぬといふのであるとのこと。成程ものには道理のあることよと思ひ當つたことであつた。聞けば、鯢釣は確に一種の技術であつて、懸つた鯢を落すといふことは、漁師にとりては恰も

國七淑女が節操を云々さるゝと同様以上に不名譽として感ぜられて居る。又其一尾の失敗で四五艘の仲間が全く收入をし損ずることだから尤なことである。夫故に彼等漁師は出漁前にも常に釣方々を稽古して、能く其要領を得た者でなくば同じ漁師仲間でも乗せて行かぬといふことである。鰹の群が方向を轉換して釣るに都合がよくなかりさうになつたら、又候散き餌を用つて彼等を寄せながら、僅二時間あまりで、頭が『もう時が来た』といふ。見れば船内ビン／＼したる鰹の山をなして居る。まあ二千あまりだらう、とぼんやりした呑氣な計算であつた。確に三千近くが僅二時間間に十八で釣り上げたのであつた。歸りは當番の屈強な壯漢ばかりの四挺櫓で曳／＼の掛聲に、船は嫩草山を掠めて過ぐる春風のやうに、フワリ／＼スラリ／＼と滑つて進む。中老の非番の漁師共、跳ぬる鰹の山の傍で舷に凭れて、陸の方の山の上から突き立つたやうな真白な雲の峰の澄み渡つた碧空に際立つて白く時てるをながめながら、『もう夏になつて來たのー』といつて居つた。濱

には出迎の女子兒などが右往左往に騒いで居る。併しまだ其聲は船までは聞えない。

雑 錄

●講習會に就て 前號に豫告せる本會夏期講習會は初め三週間の豫定なりしが講師の都合にて二週間に短縮し其代りに一日の講習時間を増加して略豫定の計畫を遂行することゝせり。講習員諸君は其御積りにて精々御勉強あらんことを望む。

地方より上京の方にて滞在其他一切の費用何程を要するかに就きて御問ひ合せの方より定めし他にも同様の御求めあらんかと存じ記者の計算せし處に因れば左の如き結果となれり

- 一金四圓五十錢也
 - 一金壹圓五十錢也
 - 一金貳圓也
 - 一金壹圓五十拾錢也
 - 計金九圓廿五錢
- 七月廿日即ち講習前日の晝食より八月四日即ち講習終了日の翌日朝食迄十五日間食料
- 寢具 損料
- 講習料
- 小遣錢、一日十錢の割、